

平成 25 年 3 月 25 日

## 小田原市芸術文化創造センター審査経過と結果

市民ホール設計者選定委員会委員長  
仙田 満

小田原市芸術文化創造センターの設計者選定では、公募に対して 46 者の応募があり、平成 25 年 1 月 7 日に 20 者に基本計画に基づく建築・環境デザイン案の提出が要請された。2 月 26 日までに 20 案が出され、3 月 9 日に 5 案の選定が行われた。そして 3 月 20 日にその 5 者の公開プレゼンテーションを経て、最優秀者と優秀者が決定された。

芸術文化創造センターの設計者は市民の芸術活動の意欲を喚起する創造性、歴史都市・小田原の都市的な環境価値をあげる建築を設計する可能性、また市民との協働者としての適性を問われて選定された。

最優秀者として選定された新居千秋さんのプレゼンテーションは多くの地方都市の市民会館や文化会館の実績を背景に、劇場の街、演者の街、創造の街という個性的な「3つの街」の実現をコンセプトとしている。小田原の地域性を十分に考慮し、大ホール、小ホール等の配置と形状において、小田原城と周辺環境に対する配慮を形成していた空間構成を提案している。また市民の活動スペースとしてスタジオやワークショップスペース等を前面に配置し、にぎわいと多様性を十分にもった都市的空間を演出している。また道路際に庇を設け、前面の広場の領域性を明確にし、その広場空間にアートスペース、エントランス、カフェ空間を形成し、町のにぎわいを創出しようとする意図も高く評価される。小田原という歴史的町並みの中で連続性を意図しており、それらの地域性、歴史性の取り組み、また都市的な構成力が大いに期待される。

外壁等の構成については、図面で寄木細工的構成と色彩が危惧されたが、プレゼンテーションにおいて小田原提灯的明かりの継承を図りたいという意図が表明された。問題点としては東西への交通については十分な配慮がないことが指摘された。また、大ホールの舞台の奥行きが、5 者の提案の中で最小であることについても不安の声が上がった。しかしながら最終的には審査員の 7 分の 5 の支持を得て、最優秀者として選定された。東西交通への配慮や大ホールの舞台面の課題等、今後の市民ワークショップにおいて計画空間の進化が望まれる。しかし多くの市民ワークショップの経験をもつ新居さんは小田原でもこれから設計を 2 年間かけて進めていくなかで、よりよく進化・前進されていくことになるとうと期待される。

優秀者は三菱地所設計+佐藤尚巳さんのチームである。全体的に馬出門前広場、エントランス広場、ギャラリー、カフェと 1 階をにぎわいのある空間として、2 階に回廊型に作

業スペースを配しており、きわめて一体感のある空間構成を形成していた。巧みな平面構成で多くの審査員の支持を得て、最終2者にのこった。和風を徹底的に意識した案ではあるが、立面的には高いガラス開口も多く、また内部空間も城を臨むためにきわめて大きすぎるラウンジロビー空間となってしまうていた。またその空間構成はよくまとまっていたがために新しい挑戦的な取り組みという点では不満が残った。また内外共に、和風の薨にこだわりすぎた意匠がこれからのワークショップの展開に審査員や市民委員等に不安を与えたことは確かである。

香山案も極めて高く支持された。そのユニークなものづくりの回廊や創造志民（市民）ラウンジの提案は市民創造活動に対し高く評価される。一方、それがまた大ホールの1階利用を疎外しないかという疑問も提出された。長寿命なホールを目指し、コンクリート躯体をできるだけ広く、深く、設置すべきだという提案をもつものであったが、そのためフライ等が高く、都市的にはなるべく建築的には低くという市民や都市側の要望と相反するものであった。また中心的な提案である芸術の庭というオーバル型の2階建ての回廊は香山案の特長の1つであったが、その利用、展開について不安をもたれた。

妹島案は大屋根が特長といえる。機能を大きな屋根ですっぽりとかぶせてしまうのは、ある意味でお寺のような日本の伝統的な空間に共通していて説得力がある。そのユニークなスリットを含め、ある種の観光的拠点をつくれるであろうことを予感させるすぐれた案であった。しかしながらその大きな屋根によって覆われてしまって、その周辺に広場や余地がないことも環境形成という点で問題も感じさせた。多くの技術的問題について設計段階においての市民ワークショップでの提案という形での対応は深い知識、経験をもつ建築家との協働という点で不安が感じられた。

大宇根案もバランスの良い平面配置が多くの支持を集めた。東西をつなぐライブストリート提案のコンセプトは高く評価されたが、その空間的構成にはいくつかの不安、疑問（単純すぎる、書き割りすぎる等）も提出された。市民活動スペースが前面でなく、国道側に位置するのも、城前のにぎわいと連動という点で危惧され、展望塔の位置等、城前のにぎわいと景観的調整についても問題点が指摘された。

最終5案はそれぞれが1/500の模型の提出により、周辺環境の中での収まりをヒアリング時に確認された。

今回決められた設計者は2年かけて市民や舞台技術者等の専門家と協働作業をしながら設計を完成していく。そこでは設計者の舞台芸術に対する高い知識と経験、かつ都市的な配慮と、市民との協働作業に熟練した能力が求められる。新居千秋さんはそのような知識、経験、配慮、見識、能力をもつ建築家として今回選定されたといえよう。